

あたらしくはいった本 (令和3年3月 貸出開始資料から)

●小説 ムーンライト・イン(中島京子/著) 帝国の甲砲(佐々木譲/著) 代理母、はじめました(垣谷美雨/著) 田中家の三十二万石(岩井三四二/著) 俺と師匠とブルーボーイとストリッパー(桜木紫乃/著) 階層樹海(椎名誠/著) ヴィクトリアン・ホテル(下村敦史/著) 168時間の奇跡(新堂冬樹/著) 幕間のモノローグ(長岡弘樹/著) いわいごと(畠中恵/著) クララとお日さま(カズオ・イシグロ/著) グレゴワールと老書店主(マルク・ロジェ/著)

●随筆・詩などの文学 ワンさぶ子の怠惰な冒険(宮下奈都/著) しつこくわるい食べもの(千早茜/著) みっちゃんの声(石牟礼道子、池澤夏樹/著) 母親を失うということ(岡田尊司/著)

●その他の本 おバカな答えもAIしてる(ジャネル・シェイン/著) 大名の「定年後」(青木宏一郎/著) ひとりぼっちが怖かった(朝日新聞社会部/著) 免疫は発酵食品でぐんぐんあがる(金城実、作間由美子/著) これがほんとお弁当のきほん(井原裕子/著)



『ムーンライト・イン』
中島京子
KADOKAWA



『帝国の甲砲』
佐々木譲
文藝春秋



『クララとお日さま』
カズオ・イシグロ
早川書房

●新型コロナウイルス感染拡大防止のため、来館の際はマスク着用などのご協力をお願いします。

みんなの としょかん



市民図書館

TEL (921) 4646

FAX (921) 4896

<http://www.library.dazaifu.fukuoka.jp/>

としょかんカレンダー

令和3年	日	月	火	水	木	金	土
5							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
	30	31					

○のついた日は休館日

金・土曜日(祝日を除く)は午後7時まで開館しています。

大伴大江丸と齋藤秋圃

おおともおおえまる
さいとうしゅうほ

大伴大江丸(1722~1805)は、本名は安井政胤、大坂で生まれ、江戸中期に主に大坂で活躍した俳人です。大江丸は飛脚問屋として三都随一と呼ばれるほどに家業を盛り立て、同時に俳人としては、江戸の大島蓼太(りょうた)入門して与謝蕪村(よせうそん)などとも交わり、蕉風(きょうふう)松尾芭蕉(まつお ばきょう)とその門人らが確立した俳諧の作風)の復興運動にも寄与しました。

秋月藩御用絵師で、のちに大宰府に隠居して町絵師となつた齋藤秋圃(1772~1859)には、俳諧の発句を列挙して絵を添える、絵俳書や俳諧刷物の作品の存在が知られます。初期代表作の風俗絵本『葵氏艶譜』(享和3・1803年刊)にも発句を掲げたページがあり、秋圃は「足齋」の名義で自作の句を1句載せています。実はこの中に大江丸も1句寄せており、両者の間には交流があったと思われます。

秋圃は若いころは亦助(又輔)と名乗り、大坂で幫間(はうかん)「たいこもち。座興などをして酒席を盛り上げる人」をしていて、絵の巧みな人物であったことを、かの有名な滝沢馬琴(たきざわ ばきん)が自身の紀行文に記しています(『羈旅漫録』享和3年刊)。両者は50歳の年齢の開きがあるものの、大江丸の最晩



～公文書館だより⑧～

年、大坂を舞台に俳諧や絵を通じて交流をもっていたと考えてよいでしょう。

齋藤家資料には大江丸に関する資料が2点遺されています。1つは『狂歌画巻』という狂歌・発句に秋圃が絵を添えたもので、その中に、大江丸の句「弁慶もたった1度よおほろ月(おほろつき)」が採録されています。

もう1つは、大江丸の自筆と思われる書状です。この書状には宛名がありませんが、齋藤家資料に含まれていること、両者が交流を持っていたことから、秋圃宛のものと考えてまず間違いありません。また「大江丸」の署名は、他に多数遺っている彼の作品に記された署名と比較して、同筆であろうと判断できます。

この書状は非常に難読で、解釈が困難なのですが、絵のやり取りおよびその代金について記されたもののようです。「秋圃と拝山―太宰府に偉才あり―」展(6月5日(土)~7月18日(日)。太宰府市文化ふれあい館・無料・月曜休館)で展示される予定なので、この機会にぜひご覧ください。

元太宰府市公文書館 朱雀 信城